

女真文字談義 (8)

—明代女真語「永寧寺碑」—

吉池孝一

解説が必要な東アジアの“文字と言語”に関心を持つ学生と教員の対話です。登場人物は次のとおり。

佐藤久美^{きとうくみ}：学生。歴史一般に関心がある。

山村健一^{やまむらけんいち}：学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。

安井教授^{やすい}：漢文の教員。いろいろな文字に関心がある。学生とともに金朝の言葉と文字の勉強をはじめた。

〈第8回目〉

佐藤久美：前は、明朝の女真語資料のうち、四夷館^{しいういかん}の女真館訳語を検討しました。

山村健一：女真館訳語には、女真人が明朝政府に宛てた進貢の上奏文を集めた「来文」と、女真語の単語と連語の語彙集である「雑字」^{ざつじ}がありましたね。

安井教授：現存する「来文」は漢文と女真文に分かれているけれども、山村君の考えでは、初期の「来文」は主文と傍訳からできていたというものでした。

山村健一：はい。そのように想定すると、①「雑字」中の名詞に各種の格語尾が付いている、②「雑字」中の動詞に各種の動詞語尾がついている、③女真文が、漢語の文法にしたがった逐語訳となっている、などの問題を無理なく説明することができます。

安井教授：女真文は破格なものですが、佐藤さんの考えによると、文体の一つであり“漢文直訳体の女真文”で、時と場合に応じて使用されたものであろうということでした。

佐藤久美：今回の勉強会の材料も明代女真語の資料でしたね。

安井教授：「永寧寺碑」^{えいねいじひ}という碑文で、明朝の永楽年間に立てられたものです。

《永寧寺碑の研究文献》

佐藤久美：永寧寺碑はどのような碑文なのでしょう。

安井教授：碑陽（表面に相当）に漢文、碑陰（裏面に相当）に女真文と蒙古文が刻されており、漢文には「永楽十一年九月廿二日立」とあるので、明の永楽11年（1413年）のものであることがわかります。この碑文を研究した文献を何篇か用意しました。

(1)安馬弥一郎（1943）『女真文金石志稿』碧文堂。

(2)長田夏樹（1958）「奴児干永寧寺記碑蒙古女真積稿」『石浜純太郎先生古希記念論叢』関西大学文学部東洋史研究室石濱先生古希記念会編。

(3)金光平、金啓琮（1980）『女真語言文字研究』文物出版社。もと1964年。

(4)愛新覺羅烏拉熙春（2009）『明代の女真人『女真訳語』から『永寧寺記碑』へ』京都大学学術出版会。

佐藤久美：これらの文献は、資料という面からみて、どのような特徴があるのでしょうか。

安井教授：(1)安馬弥一郎（1943）は拓本により女真文を模写し解説を付します。(2)長田夏樹（1958）は碑陰の女真文と蒙古文を内藤湖南所蔵拓本により復元し解説を付します。(3)金光平、金啓琮（1980）は、拓本の写真（小さくて文字資料としては利用できない）を提示するとともに、女真文を模写し解説を付します。(4)愛新覺羅烏拉熙春（2009）は、拓本の写真（京都大学所蔵拓本と思われる。小さくて文字資料としては利用できない）を提示するとともに、モンゴル文字および女真文字のフォントを利用して碑陰を復元し解説を付します。

山村健一：鮮明な実物の写真か、鮮明な拓本は、研究成果の確認にとって是非とも必要なのですが、それはないのでしょうか。

佐藤久美：契丹文字の勉強会するときには、模写とともに鮮明な拓本を見ることができました。そのため、違和感なく研究への門をくぐることでできる、という印象をもったのですが。

安井教授：そうですね。契丹文字の場合、墓誌銘など、資料自体の剥落や痛みが少なく、文字が確認できるような大きさに拡大された拓本が公開されています。女真文字資料の場合、すべてとは言いませんが、資料自体の剥落や痛みが進んでいて、文字の確認が困難なものが多いという印象を受けます。そのうえ、文字が確認できるような大きさに拡大された資料の公開が少ないようです¹。

山村健一：契丹文字の研究に比べて女真文字の研究がいま一つ盛り上がらないのは、そういった事情もあるのかもしれませんが。

佐藤久美：研究の根本である第一次資料の条件が整っていないということですね。

安井教授：契丹文字の研究が活況を呈しているのは、近年、次々と新たな墓誌銘が発見され研究に供された、ということもあるのでしょうか。

佐藤久美：わたしたちが永寧寺碑の銘文を確認するにはどうしたらいいのでしょうか。

安井教授：この碑石は、ロシアのウラジオストクの国立アルセーニエフ記念沿海州総合博物館に所蔵されているようです。見に行くということも簡単にはできませんので、精度の高い拓本によるのが一番でしょう。インターネット上のウェブサイト京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料によるのが簡便です。

¹ ウェブサイト京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料。吉池孝一、中村雅之、長田礼子『遼西夏金元対音対訳資料選』（B4版。古代文字資料館、2016年）に比較的鮮明な拓本が掲載されている。

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/>

今開いてみます。

山村健一：この画像は拡大をすることができるのですね。磨滅がかなりすすんでいます。

安井教授：金光平、金啓琮（1980）と愛新覺羅烏拉熙春（2009）によって復元された女真文と比べてみましょう。

.....

安井教授：私たちが見て復元が難しいと思った箇所は（ ）で括りましょう。文字の一部から文字全体を推定できるものは下線を引きましょう。磨滅や剥落により文字を特定できないもの、それから研究者により解釈が異なり復元された文字が異なるものは□で記します。

佐藤久美：全部で15行あります。まず、女真館訳語の情報を Kiyose,G.N. (1977)によって書き込み、次に(2)長田夏樹（1958）、(3)金光平、金啓琮（1980）、(4)愛新覺羅烏拉熙春（2009）の情報を並べてみる、というのはいかがでしょう。

安井教授：それで、おおよその研究の状況はつかめるでしょう。

《永寧寺碑の1行目》

佐藤久美：1行から3行あたりまでは、碑石のコンディションが良くないようで、見えない部分が多いですね。

安井教授：できるかぎり文字を確認し、女真館訳語の情報を入れましょう。女真館訳語から得られない情報は（ ）で括ります。次いで、どの様に読まれているか幾つかの読みを(2)(3)(4)としてならべるのですが、単語や連語はローマ字転写の部分に“ha gan”のようにアンダーラインを付します。後で問題にする箇所には①②など丸数字を付します。

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---------------|-----------------|---------------|-----------------|------------------|-----|-------|-----|--------------|----------------|------|-----|-------|---------------|
| 天 | 彛 | 𐰺 | 𐰽 | (𐰽 𐰽 𐰽) | 𐰽 | 𐰽 | 𐰽 | (𐰽) | 𐰽 | 𐰽 | 𐰽 | (𐰽) | 𐰽 | 𐰽 |
| 訳語 | dai | mi | <u>ha gan</u> | ni | <u>arawa gi</u> | nu | ru | e | ni | <u>buwa</u> | --- | ir | ----- | <u>tai ra</u> |
| | ①(大明) | 皇帝の | 勅により | ②(奴兒干) | の | 地方に | ③(永寧) | | | | | | | 寺 |
| (2) | <u>dai mi</u> | <u>qa gan</u> | ni | <u>alava gi</u> | <u>nu ru gen</u> | ni | buca | də | <u>yi un</u> | [<u>nin</u>] | | | | <u>tai ra</u> |
| | 大明 | 皇帝 | の | 勅により | 奴兒干 | の | 地 | に | 永 | 寧 | 寺(を) | | | |
| (3) | <u>dai mi</u> | <u>xa (g)an</u> | ni | <u>alawa gi</u> | <u>nu ru gan</u> | ni | bua | du | <u>i-yn</u> | | | | | <u>tai la</u> |
| | 大明 | 皇帝 | 的 | 勅 | 以 | 奴兒干 | 的 | 地方 | 於 | 永 | 寧 | 寺 | | |
| (4) | <u>daimi</u> | <u>hağan</u> | ni | <u>alawa gi</u> | <u>nurgan</u> | ni | buğa | du | <u>i-jun</u> | | | | | <u>tai ra</u> |
| | 大明 | 可汗 | の | 勅により | 奴兒干 | の | 地方 | に | 永(寧) | 寺 | | | | |

.....

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-------|---------|----|---|--------------|------|-------|--------|-----|------|----|---|-----|------|----------|
| 𐰽 | 𐰽 | (𐰽 𐰽 𐰽) | 𐰽 | 𐰽 | 𐰽 | (𐰽) | 𐰽 | 𐰽 | 𐰽 | 𐰽 | 𐰽 | 𐰽 | 𐰽 | 𐰽 | 𐰽 |
| 訳語 | jisu- | -mei | bi | i | <u>we he</u> | ili- | -bure | dondi- | -či | abka | te | e | bi- | -mei | gengiyen |

- 作り ④(碑) 石 立てる 聞けば 天 高い(tege) 有り 明るい ()
- (2) jisu mei bi ? vu xe il bure dondi ci abqa de gen bi mei gen gien boi xon
 造り 碑? 石(を) 立てる 聞けば 天は 高く あり 明るく 大地
- (3) dʒisu mei bie i wə xə ili bumə dondi ʧi abxa də ə bie mie gen gien na doro
 造 碑 石 立 聞 天 高 而 明 地
- (4) dʒisumei bii wəhə iliburan dondiʧi abuga dəgən biməi gəngien oro
 造り 碑 石 立てる 聞けば 天 高い かつ 明るい 輿地

- 彡 彡 右 关 豸 丈 □ 厶 右 仵 □ 方 彡 压 □ 冫 杀 右 □
- 訳語 ba daši-me diyen te- -ru dira mei gun tuman han uje ji mei
 を 覆う できる () 厚い () 万 ⑤(生あるもの) ⑥(養い)
- (2) ba elbe(dasi) mei dien de ru ... dira mai ... tumen er ge ne be ji la xôn
 を 覆い 得ること 厚く 万の 生霊 を 慈愛
- (3) ba daf'i mei tən də ru ... dila mei un ? tumən wei xun on go ji mei
 把 覆 能 厚 重 萬 生霊 養
- (4) ba dafiməi dəndəru ... diraməi ... tumən uihan ba udʒiməi
 を 覆い 得る (地) 厚い (広い) 万 生霊 を 養い

- □ 厶 彡
- 訳語 e gai
- (2)
 (3) ə gai
 啊
 (4) gai
 かな

安井教授：1行目に対応する漢文は「勅修奴兒干永寧寺記。伏聞天之德高明、故能覆幬。地之德博厚、故能持載（勅命により奴兒干の永寧寺の記を修する。謹んで聞く、天の徳が高く明るいため、[万物を]覆うことができ、地の徳が博く厚いために、[万物を]支え載せることができる。」です。

山村健一：前後関係により①dai -mi は「大明」であり、漢文により②nu-ru-e と③ir ----- tai-ra(寺)は、それぞれ「奴兒干」「永寧」の漢字音を音写した部分であることがわかります。

佐藤久美：④の bi-i we-he(石)の bii は、前後関係から碑であろうとは思いますが、确实

な根拠はないのでしょうか。

安井教授：(3)金光平、金啓孫(1980)によると、満州語の碑文の中に bei wehe(碑文)という語があり、bei は碑の漢語音を音写したものとのことです。

佐藤久美：⑤の𠂔𡗗... han の𠂔は女真館訳語に出てこない文字ということで、音形はよくわからないのですが、(3)金光平、金啓孫(1980)は満州語文語の形容詞 weihun(生きた)に関係づけているようです。「生あるもの」というくらいの意味でしょうか。

山村健一：⑥𠂔𡗗右 uje-ji-mei の𠂔は、(3)金光平、金啓孫(1980)では𠂔 go ですが、ここでは(4)愛新覺羅烏拉熙春(2009)の説により𠂔としたわけですね。動詞語尾-meiがあるので動詞であることはわかるのですが、満州語文語に関連する語はありますか。

佐藤久美：(3)金光平、金啓孫(1980)で ujimbi をあげます。これは「養う」という動詞です。

山村健一：そうすると 1 行目は、「大明皇帝の敕により奴児干の地に永寧寺を作り碑石を立てる。聞けば、天は高く有り明るく、()を覆うことができる。()は厚く()、^{ᠠᠳᠠᠰᠤ}方の生あるものを養う。」ということでしょうか。

《永寧寺碑の2行目》

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|----------|-------|------------|-----------|--------|------|---------|-----|------------|-------|--------|----|---------|--------|------|-----|-----|-----|--|
| | 𠂔 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | |
| 訳語 | ha | gan | ni | uši | ir | --- | tuman | ite | e | e | he | gi | bandi- | -bu- | -hai | --- | | | |
| | 皇帝の | | ①(恩沢) | | に | | 万 | | 民(itege) | | ②快く | | 生活させた | | 於いて | | | | |
| (2) | qa | gan | ni | usi | ir | də | tumen | ite | el | el | xe | gi | bandi | bu | xai | də | | | |
| | 皇帝の | | ・・・ | | に | | 万 | | 民(を) | | 平安により | | 生育した | | ときに | | | | |
| (3) | xa | (g)an | ni | ufi | ilə | du | tumən | itə | ə | ə(l) | xə | gi | bandi | bu | xai | du | | | |
| | 皇帝的 | | 恩顯 | | 萬 | | 民 | | 安 | | 以 | | 使 | | 生了於 | | | | |
| (4) | xağan | ni | ufiir | du | tumən | itəl | əlɣə | gi | bandibuhai | du | | | | | | | | | |
| | 可汗の | | 恩沢 | | で | | 万 | | 民 | | 平安によって | | 生活させたこと | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 𠂔 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | □ | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | 𡗗 | |
| 訳語 | tiko | e | le | hi | | ur | gun | je | goro | on | lo | hi | niyarma | ili- | ta | ha- | -la | | |
| | ③(近くの) | | () | | 喜び | | 遠い | | 人 | | 立つ | | 従う | | | | | | |
| (2) | teyi | ken | le | xi | gemu | ur | gun | je | nu | goro | on | lo | xi | ti | xai | da | ha | ara | |
| | 近くにあるもの | | 皆 | | 喜び合い | | 遠くにあるもの | | 随意に | | 従う | | | | | | | | |
| (3) | tixo | ə | lə | xi | wən | ur | (g)un | dʒə | bəgi | goro- | on | lo | xi | nialma | ili | da | xa | ra | |
| | 近處的 | | 感化 | | 歡喜 | | 遠方的 | | 人 | | 立 | | 歸服 | | | | | | |
| (4) | tikaləhi | dəigi | urğundzərə | goronlohi | niarma | | tahara | | | | | | | | | | | | |

近くの 士 喜んだり 遠くの 人 従ったりする

安井教授：対応する漢文は「聖人之徳神聖、故能悦近而服遠、博施而濟衆。（天子の徳が
気高く優れていることにより、近くの者を喜ばせ遠くの者を従わせ、博く施し
多くの人々を救うことができる。）です。

佐藤久美：①の ušir を恩とする根拠は何でしょう。

安井教授：(4)愛新覚羅烏拉熙春（2009）は満州語文語の usihimbi(湿る)に関わる可能性があ
るとし、恩沢と推定します。

山村健一：②の ehagi は女真訳語で「快」とありますが、(2)(3)(4)は「平安をもって」とし
ます。これはどういうことでしょうか。

安井教授：満州語文語に elhe(名詞。平安)があります。ehe を elhe(名詞。平安)にあて、-gi
を格語尾の造格（～をもって）とするわけです。③の 兕 兕 兕 tiko-e-le-hi は女
真訳語や満州語文語では解決できないようです。

佐藤久美：漢語訳によると「近くの者」に当たる部分ですね。11 行目に 兕 兕 tiko-hun があ
り漢語の「近く」やモンゴル語の oyirakin(近くの)に当たりますから、兕 tiko が
近いという意味であろうことはわかります。

佐藤久美：そうしますと 2 行目は、「皇帝の恩沢に於いて、万民を、平安をもって生活さ
せたことで、近くの（ ）は喜 び、遠くの人 は 立って従う。」というところ
でしょうか。

《与位格語尾の 兕 と 兕》

佐藤久美：ところで、第 1 行目の 兕 兕 buwa(地方) --- (に)の 兕 は、与位格語尾ですが、女真
館訳語には出てきませんので音はわからないということですね。たしか女真館
訳語では 兕 兕 buwa(地域)-do(で)のように 兕 でした。

山村健一：金光平、金啓琮（1980）よって金代女真語を見ると、男性母音+ 兕 do、女性母
音+ 兕 du であり、兕 do と 兕 du は母音調和にしたがって交替します。兕 buwa(地
域)は男性母音からなるので 兕 do が付くはずですが。永寧寺碑ではどうして女性母
音用の 兕 が使われるのでしょうか。

安井教授：わかりません。とりあえず、金光平、金啓琮（1980）によって、永寧寺碑にお
いて 兕 と 兕 がどのように使われているかを確認してみましょう。

.....

佐藤久美：男性母音+ 兕 du は 10 例、女性母音+ 兕 du は 4 例、男性母音+ 兕 do は 2 例、
となっています。

山村健一： 兕 du と 兕 do は字形が似ているので、間違いがないかどうか拓本で確認しまし
ょう。.....男性母音+ 兕 du の 10 例中、2 例のみ磨滅で確認できませんが、
他は確認できます。とくに男性母音+ 兕 do は 2 例とも極めて明瞭です。

佐藤久美：そうしますと、前に来る名詞の母音の種類に関わらず女性母音用の単 **du** が用いられるところは清の満州語文語と同じですね。一部に母音調和にしたがって、男性母音用の単 **do** が用いられます。このことについてはどのように理解したらいいのでしょうか。

安井教授：明代女真語では単 **du** と単 **do** の区別はなかったが、特定の語彙においては表記の上で単 **do** が使用されることもあった、ということではないでしょうか。

佐藤久美：女真館訳語では男性母音用の単 **do** が使われています。これはどのように考えたらいいいのでしょうか。

山村健一：これも使用の実情を確認しましょう。Kiyose, G.N. (1977)は、「雑字」に出てくる次の例をあげます。

dat.-loc.与位格

- 70 奎単 **buwa**(地域)-**do**(で)
- 81 玫岌単 **fon**(時)-**do**(に)
- 605 千友 **dalba**(傍ら)-**la**(で)
- 816 南球単 **andan**(途中) -**do**(で)

すべて男性母音の例です。女性母音 **e** からなる単語に与位格が付いた例はないようです。ですので、単 **du** と単 **do** の区別の有無は確認できません。

安井教授：単 **du** と単 **do** の区別があったか無かった確認できないので、女真館訳語と永寧寺碑の女真語が同じものであったと即断することはできませんね。ともに明代女真語の資料ではありますが、何らかの点で異なっている可能性もあるので注意が必要です。

山村健一：なんらかの違いとはどういうことでしょうか。

安井教授：方言の差があるかもしれません。また、女真館訳語の「雑字」の単語には明代以前の擬古的な部分が含まれるかもしれません。その点は、わかりません。今のところは、明代女真語では単 **du** と単 **do** の区別はなかったが、特定の語彙においては表記の上で単 **do** が使用されることもあった、としておきましょう。

山村健一：ところで、単が女真館訳語の「雑字」に無いとすると漢字による音注も無いわけで、そうすると、発音もわからないということになりませんか。(2)長田夏樹(1958)は **da**、(3)金光平・金啓琮(1980)と(4)愛新覺羅烏拉熙春(2009)は **du** とするわけですが、それぞれ根拠は何でしょうか。

安井教授：長田氏の **da** は永寧寺碑のなかでの処置のようです。金代女真語では母音調和にしたがって男性母音+単と女性母音+単の二つが交替するのですが、満州語文語では男性母音/女性母音+**de** (母音 **e** は[ə]) のように **de** のみになります。明代女真語の永寧寺碑でも単と単の区別は無くなり単のみが使われると判断して、満州語文語と同様に **da** としたと推測します。(3)(4)で **du** とする根拠はわか

りません。今後の課題にしましょう。

《位格語尾 la など》

佐藤久美：先に、「雑字」中の与位格語尾の単語を Kiyose,G.N. (1977)によって確認しました。そこで疑問があるのですが、単 do 以外に、605 に干友 dalba(傍ら)-la(で)があがっています。この友 la と、単 do や単 du はどのような違いがあるのでしょうか。

安井教授：友 la について、Kiyose,G.N. (1977 :70)には次のようにあります。

196 友 *la(刺)denominal verbal suffix: 271, 305, 334, 387, 430, 471, 504, 547, 564, 605, 510, 621, 724, 734, 744, 760, 768, 802, 833, 835, 848, 10, 12, 17, 20, 25, 31, 34. Ligeti also reconstructs *la. This suffix is appended to back-vowel nouns, and also denotes dative-locative case. Cf. character 313.

これによると、友 la は名詞に付して動詞を作る接辞であるとともに与位格 (dative-locative case) 語尾でもあり、母音調和により、他に侘 le があるとのこと。これは Ligeti(1953)(1961)の説にしたがったもののようです。

Ligeti(1953)(1961)などを丹念に読むということでしょうか。

山村健一：その説と関係があるかどうかわかりませんが、長田夏樹 (1958) の解説をみると、永寧寺碑の 2 行目の③毛乎侘屨 tiko-e(近い)-le-hi (近くにあるもの) や、直後の goro-on(遠い)-lo-hi (遠くにあるもの) の le や lo を、処格 (位格) と考えるべきとします。

安井教授：その lehi と lohi ですが、愛新覚羅烏拉熙春 (2002) は「向位格」とし²、愛新覚羅烏拉熙春 (2009) は「方位詞語尾」とします。ここでは、様々な考えがあるという確認をするだけに止めましょう。

今日の勉強会は、このくらいにします。

² 愛新覚羅烏拉熙春 (2002) 『女真語言文字新研究』明善堂、77-78 頁。